

聖霊降臨後第20主日(特定26) 2011/10/30
聖マタイ福音書第23章1節～12節
於:聖パウロ教会 司祭 山口千寿

長い準備の期間を経て、今日は聖パウロ教会の恒例のバザーを、この礼拝の後、皆さんのご協力のもと開催するに至りました。今年のバザーの主な目的の一つは、東日本大震災で被災した方々を覚えて支援することにあります。3月11日の未曾有の出来事から、はや、7ヶ月以上経っていますが、広範囲に亘る被災地の復興とそこに住む人々の生活の安定には、まだまだ長い時間と莫大な費用とがかかることでしょう。

わたしも今まではマスコミのニュースや教会関係の情報を通して、被災地の様子を知るだけでした。実際に自分の目で見るとはして来ませんでした。その理由は、1つには、現地に行ってボランティア活動に参加するには体力的にも時間的にも難しいし、第2に、災害の大きさが余りにも凄まじ過ぎるために、被災された方々の心の内を慮ると、特別に用事があるわけでもなければ、何かの役割を担っているのでもない人間が、ただ様子を見て回るために訪れるには気が咎めて、現地に行くことは控えておりました。

そうしているうちに、大震災発生の際に比べて、自分の中でこの出来事が占める大きさが、徐々にしぼんでいくことに気づきました。毎主日、礼拝の中でお祈りは続けていますが、現地に張り付いて支援活動をしている人たちとの間に、精神的な距離感が広がって来ているように感じられるようになって来たのです。「いっしょに歩こう!」というスローガンを、日本聖公会の支援プロジェクトは掲げていますが、わたしにとっては、言うは易し行なうは難しで、このままでは過去の思い出になりかねないと、危機感もまた感じていました。

そんな折に、9月の教区フェスティバルで、仙台に常駐しているこのプロジェクトの事務局長をしている中村 淳司祭と話をする機会がありました。「是非、現地を見に来てください」と呼びかけられました。「ボランティアをしたくても、他の

方に迷惑をかけることになってはいけないうので遠慮しています」と返事をしました。すると、中村司祭は、「いや、何もしなくていいですから、お金を落としに來てください」と勧めてくれました。

8月まで避難所として使われていたホテルが、避難所が解除になって、しかし、お客さんが來なくて閑散としているとのことでした。中村司祭の考えでは、現地の生活が落ち着くには経済活動が欠かせないので、今、一番と必要とされているのは、現地にお金の流れを作ることだということです。お金の流れを作り出すほど、大きなお金を落とすことなどとてもできないわけですが、貧者の一灯ではないけれども、多少のお金なら工面することはそんなに困難なことではありませんから、この言葉で気が楽になり、心を動かされました。勇気を与えられて、10月10日と11日がわたしには珍しく連休になりましたので、その機会を利用して、わずか一泊ではありましたが、現地を家族で訪れることにしました。

中村司祭に紹介してもらい、志津川の温泉ホテルに宿を取りました。聖公会の支援プロジェクトのニュースレターを詳細にご覧になっている方は、ご記憶にあると思いますが、志津川という町は、宮城県の東北部、岩手県に近いところに位置しています。太平洋に面したリアス式海岸の南三陸町にあります。仙台からホテルのバスで約2時間かけて行きました。JRの路線があるのですが、まだ復旧しておらず、代替バスがあることはあるのですが、その情報がなくて、ホテルのバスを利用しました。

山間の道を走って志津川に近づくと、山の裾の方に立っている木は、赤茶けて立ったまま枯れていました。その枯れ木がかなりの間続くのです。そこまで海水が押し寄せたのでしょう。更に町に近づいて行くと、道の両側には自動車の残骸が何台もそのまま放置されているのを目にしました。海岸にでると、コンクリートの建物が傾いて立っていたり、厚い防波堤の一部が、破壊されてなくなったり倒れたままになっていました。地震と津波の物凄さを感じて、バスに乗っていた数人の客は声を潜めて囁き合っていました。

泊まったホテルは、海に面して建てられているのですが、水面から3メートルくらいの高さの土台の上にある9階建てのビルです。その2階部分まで津波が押し寄せたと言いますから、おそらくこの聖堂の天井よりももっと高い所にまで達したのでしょう。2階にあった大浴場も壊されたということでしたが、わたしたちが行った時は、既に修復されて新たな装いで利用することができました。

穏やかな表情を湛えている海を露天風呂の中から眺めながら、何事もなければ豊かな恵みを与えてくれる海が、一旦、猛り狂うと信じられないようなとんでもない猛威を振るうことになるのだと改めて思いました。人間が自然を敬い畏れる心を忘れ、理性の力で自然のメカニズムを解明して支配し、破壊をほしいままにしようとする驕りへの強烈な警告が与えられた出来事でもあるでしょう。

ホテルは、志津川の町の中心地からは、徒歩で小一時間くらいかかる場所にあるので、町の中心までは行くことはできなかったのですが、20分くらい歩いた舟寄せ場の堤防の上から、町の様子を眺めて来ました。海岸にある3階建てのビルは、開口部のすべてが黒い口を開けており、津波の爪痕を見て取ることができました、その隣のグラウンドには、建物と同じくらいの高さにまでガレキがうずたかく積まれており、今なお、ショベルカーが2台、働き続けていました。堤防の上の崖地は土がえぐり取られ、高い木の上には漁具やガレキが引っかかったままで残っていました。

わたしが目にしたところは、そのくらいでした。現地の人たちからお話を伺うことは、はばかれてできませんでしたが、それでも報道を通して知ると、実際に見るとでは受けるインパクトが全く異なります。皆さんも機会がありましたら、是非、お出かけになることを、そしてお金を沢山、落として来られることを、お勧めしたいと思います。

志津川の町には教会は1つもないようですが、そこで聖公会の支援活動が行なわれています。それは、かねてより、仙台の聖ペテロ伝道所で行なわれて来た「おもちゃ図書館」と志津川のおもちゃ図書館との間につながりがあって、被災した志津

川のおもちゃ図書館を通して関わりが生まれたことによるそうです。おもちゃ図書館というのは、障がいがあるために上手に遊べない子どもたちや、人との関わりがよくできない子どもたちが、おもちゃで遊んだり、ボランティアと安心して楽しむ時間を過ごすことで、自分の気持ちを表現できるようになったり、人と一緒に何かをできるようになることをめざし、また人を思いやる優しさなどを育てていく場を提供する運動です。その活動の場とそれに携わっている方々が被災されました。

聖公会の支援プロジェクトの方針に、被災者のうちでも、特に困難な中にある方々に思いを寄せるとあるので、おもちゃ図書館を通して志津川でのプログラムが始められました。

そのプログラムの1つに、フィリピン人の女性を対象にした日本語教室があります。現地の日本人と結婚している方々です。しゃべることは不自由はないのですが、読み書きが難しいのです。そのため、被災直後は、情報が的確に伝わらずに不安な毎日を過ごしたことも、教室が始まった動機の1つであったようです。また彼女たちはカトリックなので、この教室のある日は、司祭がいれば聖餐式が行なわれ、霊的な、また司牧的な要求にも応えているようです。

中村 淳司祭は、これらのフィリピン人の女性たちに、「『ファーザー、見捨てないでね』と言われました。そしてその言葉が重く心に響いています」と、わたしへのメールにありました。中村司祭ご本人との関わりということもあるでしょうが、そればかりではなく、この言葉は、教会に向けて訴える心の叫びではないでしょうか。この叫びにわたしたちも応えるのです。

言い表しようのない凄まじい力のもたらした破壊から復興するための働きとしては、中村司祭の働きも教会の働きも小さなものでしかないかも知れません。しかし、彼は、彼女たちのそばにすることが必要とされていると感じています。彼を通して、そしてまたボランティアを通して、教会は彼女たちに寄り添うのです。「見捨てないでね」という言葉に応えるのです。それが、教会がイエスさまに求められ

ている働きです。その働きは、ほかの何ものにも変えることのできない大きな力となるのです。

「あなたがたのうちでいちばん偉い人は、仕える者になりなさい。」このイエスさまのみ言葉を、今日、わたしたちは聞き、従うのです。仕えるということ、それは、わたしたちがどこに目を向けるか、それが問われているのです。イエスさまがご覧になるところに、わたしたちも目を向けるのです。それが、わたしたちが今日、このバザーで行なおうとしていることです。

皆さんの上に、主の祝福が豊にありますよう祈ります。